

## はじめに

学校長 戸部秀之

平成 29 年 8 月に、文部科学省は、「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて一国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書一」を取りまとめました。全国の国立大学教員養成大学・学部の関係者がこの報告書にとりわけ高い関心をもっているのはもちろんのことです。それは、その内容が今後のわが国の国立教員養成大学・学部、大学院、そして附属学校の改革の指針を示す大変重要な報告書だからです。附属学校園の関係者にとっても、これまでに経験したことの無い大きな改革を求められているといっても過言ではありません。

この報告書が附属学校園に求めているのが「地域のモデル校」としての役割です。本校でも、本集録でご紹介するように教員が総力を結集して学校研究に取り組んでまいりました。有識者会議の報告書が附属学校に求めているのが、附属学校として、公立の多くの学校に参考にしてもらえる研究・教育の成果を地域に発信することです。地域の学校に、「附属の研究や実践は役に立つ」と言っただけのような成果の還元ができてこそ、附属の存在意義がより確かなものになると言えるでしょう。

さて、「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」をテーマとする学校研究が 2 年目を迎えました。このテーマは、平成 22 年度～平成 27 年度の 6 年間で取り組んできたキャリア教育に関する研究の成果と課題をもとに、さらに充実した指導・支援へと発展すべく、平成 28 年度から 4 年間の計画でスタートしております。

本テーマでは、「授業づくり」を、個別の指導計画に基づく児童生徒の実態把握から目標設定、手立ての設定、評価までの一連の流れと捉え、児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業づくりの仕組みを明らかにすることを目指して取り組んでおります。

平成 28～29 年度では個別の指導計画における根拠を明確にした年間や前後期の目標設定をするために必要な視点や考え方を整理しました。その成果をもとに、特に本年度では個別の指導計画の見直しと年間指導目標の設定等を行いました。さらに授業実践を通して取り入れた視点や考え方が適切だったか検討を進めております。多くの皆さまからは、是非忌憚のないご指導を賜りたくお願いする次第です。今後も、特別支援教育の原点に立ち返り、授業づくりの大切なプロセスを入念に検討しながら、より根拠のある、児童生徒が力を発揮する授業づくりへと研究が発展していくよう、3 年目以降も取り組んでいく所存です。

結びにあたり、本研究の遂行にあたって多くの方々にご指導ご助言を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。また、本校の教育活動をともに支えて下さる保護者の皆さま、地域の皆さま、そして児童生徒の皆さんに、心より感謝の気持ちを表したいと思っております。

# 第 1 章

## 研究の概要

# 研究概要

## 研究テーマ

一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり  
～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～（2年次／4年研究）

## 研究目的

児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業づくりの仕組みを示す。

### 1 テーマ設定の理由（平成 28 年度、1 年次に設定）

#### 1-1 これまでの取り組みと本校の課題について

本校では平成 27 年度までの 6 年間、キャリア教育をテーマに研究を行ってきた（前研究とする）。前半の 3 年間では、一貫性のある教育を行うための全校共通の視点と各学部の視点を示した。全校としては「将来像」という視点を設定した。「将来像」とは、「自分の力を最大限発揮している様子を想定した、児童生徒の 23～25 歳児の姿」である。その将来像を描くために、学部ごとに「将来像作成の観点」を設定した。これらの視点は、現在の各学部における指導計画の作成にも活かされている。後半の 3 年間ではその視点を活かした授業改善に取り組んできた。「現在の『生き生き』が、将来の『生き生き』につながる」を合言葉に、1 時間の授業における改善のための視点、方法などが整理されてきた。しかし、場合によっては活動が子どもにそぐわないものになってしまったり、用意した支援が子どもに合わなかったりすることもあった。また、活動としては成立しているが、その目標が本当に子どもの課題を捉えたものになっているかという点で疑問を生じる授業が見られたこともあった。そのため、いわゆる「授業づくり」において、例えば実態把握の仕方一つとってもそれがどのような根拠に基づいてなされているかという点では、一貫性のあるキャリア教育の視点からだけでは客観性・妥当性は不十分と感じられた。

つまり、これまでのような教員の主観だけでない新たな視点を取り入れ、より適切な実態把握を行えるようになること、課題をしっかりと捉えた目標設定（目標・手だて）をすることができるようになること、また、評価をもとに改善をし続けていく仕組みが作られることが、本校の授業づくりをより充実させることができるのではないかと考えた。

#### 1-2 個別の指導計画について

目標設定や授業計画を立てる根拠となる実態把握は、本校では個別の指導計画に記載されている。個別の指導計画は本来、学期や単元ごとの授業計画と併せて、1 時間 1 時間の授業実践の指導内容や目標、支援方法などの根拠となるものになっているはずである。

個別の指導計画について学習指導要領では、「各教科等の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成すること。また、個別の指導計画に基づいて行われ

た学習の状況や結果を適切に評価し、指導の改善に努めること。」とされている(文部科学省, 2009)。そして特別支援学校においては多様な実態の児童生徒に対して、個々に応じた適切な指導を行うために、自立活動、及び各教科等にわたっても個別の指導計画を作成することとなっている。

本校では平成 15 年度から個別の指導計画の作成を始めているが、学部の教育課程編成の考え方を重視し、平成 25 年度まで学部ごとに異なる書式を使用していた。しかしながら、平成 25 年度に学校教育目標の具現化と 12 年間の一貫教育の確立に向けて、さらに読み手である保護者にとってわかりやすいものにするための検討を行い、平成 26 年度から下図のような 3 学部共通の書式を使用している。

1 枚目(年間①)は児童生徒の現在の状況(実態)についてと長期目標(個別の教育支援計画より転記)、2 枚目(年間②)には各学部のめざす子ども像と、年間指導目標と手だて、及び評価・分析、3 枚目以降に前後期の各授業場面における目標と評価・分析を書くようになっている(図 1)。そして実態については、自立活動の 6 区分で記載するようになっており、これは埼玉県教育委員会が示した個別の指導計画(教育支援プラン B)と同じ形式となっている。2 枚目には、一貫した教育課程編成を意識し、各学部のつながりが見えるように全校、そして各学部のめざす子ども像が書かれている。3 枚目以降の前・後期分の指導計画については、1 学期を前期、2・3 学期を後期として作成している。

取扱い注意 個別の指導計画(年間)① 平成〇〇年度  
埼玉大学教育学部附属特別支援学校  
〇学部〇年(組) 〇〇 〇〇 記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 現在の状況

健康の保持 (日常生活面、健康面など)	
心理的な安定 (情緒面、状況の理解など)	
人間関係の形成 (人との付き合い、集団への参加など)	
環境の把握 (感覚の活用、認知面、学習面など)	
身体の動き (運動・動作、作業面など)	
コミュニケーション (意思の伝達、言語の形成など)	
特記事項 (性格、行動特徴、興味関心など)	

2 長期目標

目 標	評 価 ・ 分 析
・	
・	

**個別の指導計画(年間①)**

取扱い注意 個別の指導計画(年間)② 平成〇〇年度  
埼玉大学教育学部附属特別支援学校  
〇学部〇年(組) 〇〇 〇〇 記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 めざす子ども(生徒)像

めざす子ども像(全校共通)	小学部	中学部	高等部
・明るく活発で、健康な子	・けいこな子	・やるべきことをやる生徒	・自立した生徒
・じっくり考え、進んで行動する子	・がんばる子	・やる気のある生徒	・自ら学ぶ生徒
・社会のよさを守り、行動する子	・なかよくする子	・なかまとともに学ぶ生徒	・社会性のある生徒
・自然のよさ、文化を大切にする子			

2 年間指導目標

目 標	手だて	評 価 ・ 分 析
①		
②		
③		

**個別の指導計画(年間②)**

取扱い注意 個別の指導計画(平成〇〇年度・前期) 埼玉大学教育学部附属特別支援学校  
〇学部〇年(組) 〇〇 〇〇 記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 学期指導目標(個別の指導計画(年間②)より転記)

目 標	評 価 ・ 分 析
①	
②	
③	

2 指導目標の達成に向けて必要な手だて(個別の指導計画(年間②)より転記)

手だて	評 価 ・ 分 析
・	
・	
・	

3 前期の指導目標

指導目標	評 価 ・ 分 析
日常生活 ----- (前)	
生活 ----- (後)	

**個別の指導計画(前・後期)**

図 1 本校の個別の指導計画

このようにして改善してきた個別の指導計画ではあるが、これまでのキャリア教育をテーマとした研究で得られた学部での成果を取り入れ、個別の指導計画作成の際にも学部独自の作成や検討の仕方を行うようになってきた。また、人事異動による教員の入れ替わりから、共通理解がなされていないなかったり、記載されている実態が指導に活かしにくい、目標がどういう理由から設定されたものかわからないため指導の方向性が定まらない、評価が次の指導につながりにくい等、指導計画そのものが形式的なものになってしまってきたりしているのでは、という意見も出てきている。

このように個別の指導計画が必ずしも実際の授業実践に活かしきれていない現状であることは、本校の課題ともいえる。

一方、新学習指導要領の改訂に向けて文部科学省は、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」において、以下のように述べている。個別の教育支援計画・個別の指導計画については、作成・活用の留意点（一例として、PDCAサイクルによる評価・改善）をそれぞれの計画の関係性をふまえながら示すことが必要であること、特に学習の評価については各教科の目標に準拠した観点別による学習評価を導入し、学習評価を基に授業評価や指導評価を行い、教育課程編成の改善・充実に活かすことのできるPDCAサイクルを確立することが必要である。

また、自立活動については既に記載のある指導計画の作成の手順等に加えて、実態把握、指導目標（ねらい）の設定、指導項目の選定、具体的な指導内容の設定といった各プロセスをつなぐポイントを分かりやすくすることが求められている。

実態把握、目標や指導内容等の設定、評価などの各プロセス、またそのプロセスをつなぐ部分に必要な視点や考え方を整理し、指導実践の充実につながるような仕組みを確立することが必要であると考えます。

前項で述べた通り、前研究の取組から1時間1時間における授業づくりの必要な視点や考え方は整理されてきた。これは個別の指導計画におけるPDCAサイクル(図2)の中の「指導計画の実行(Do)」の部分の改善にあたる。個別の指導計画において本校はこれまでも、PDCAサイクルの中でより良い授業実践をめざし進めてきた。しかし、きちんと活かしきれていない状況を踏まえると、前研究での授業改善の取り組みに加え、授業実践に至るまでの実態把握から目標、手だての設定までの部分、そして授業実践後の評価の部分を見直し、考え方や視点を整理していくことで、より授業実践に活かせるものにしていく必要があると考える。

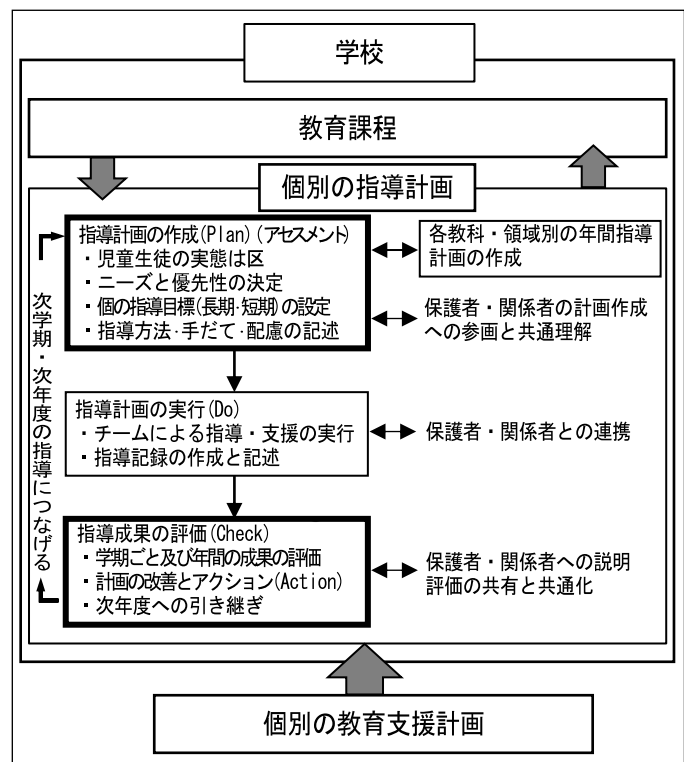


図2 個別の指導計画におけるPDCAサイクル  
 [出典：全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著  
 「知的障害教育における専門性の向上と実際」(2012)より]

### 1-3 研究テーマについて

以上のように本校のこれまでの学校研究から明らかになってきた課題と個別の指導計画にかかわる現状を踏まえつつも、最終的には授業づくりの仕組みの見直しの中で、子どもたちのより良い姿を引き出していく必要がある。

本研究においても単に個別の指導計画を見直すだけではなく、本校の教育方針である、「一人一人のもてる力を最大限に発現させることによって、社会の主体としてたくましく生活できる子どもを育てる」という原点に立ち返って、「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり」をめざしたい。

また、授業づくりのPDCAサイクルの中で特に大事にしたい「実態把握から目標設定」「目標設定から評価」、そして「評価から実態把握・目標設定（手だて含む）へのフィードバック」の3点に着目し、研究テーマを「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」として、子どもたち一人一人が授業実践で生き生きと活躍する姿を引き出したいと考える。

## 2 研究目的について

### 研究目的

児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業づくりの仕組みを示す。

研究テーマにある、子どもたちの「力を発揮し、活躍する」姿を、より具体的に「目標達成に向けて力を発揮する姿」とし、児童生徒が授業の中で目標に向けて頑張る姿を引き出していくこととした。

そして、そのためには、子どもたちの適切な実態把握ができること、目標設定ができること、また、個別の指導計画における目標と授業実践における目標のつながりを明確にしていくことが必要である。個別の指導計画のPDCAサイクルを通しつつも適切な実態把握、妥当な目標設定等を導き出すための検討の仕方や視点等を整理し、形にしていくことをめざす。自分ができるようになるだけでなく、みんなが同じように考え、実施できるようにするため、研究目的を「授業づくりの仕組みを示す」とした。

なお、本研究において「授業づくり」とは、児童生徒の実態把握から目標や手だての設定、授業計画を立て実践、評価までの一連のプロセスを示すこととする。

## 3 研究方法について

本研究では、個別の指導計画における「指導計画の作成(Plan)」の部分と「指導成果の評価(Check)」の部分に焦点を当て、必要な視点や考え方の整理を行う。前研究で取り組んできた授業改善に加え、指導計画の作成・評価について見直し、必要な視点や考え方を整理することによって、授業実践における指導内容や目標、支援方法などの根拠が明確になり、ねらいのぶれない目標設定や実態に合

った課題設定等ができるようになることを考えた。また、指導計画の作成・評価における各プロセスやプロセスをつなぐ部分に共通の視点を設定することで、教員個人の主観だけではなく、みんなが同じように考えることができるようになったり、大事にしたいことが共有されることで、同じ方向を向いて検討ができるようになったりすると考えた。

個別の指導計画における作成・評価に焦点をあて、必要な視点や考え方を整理し形にすることで、一人一人がより活躍できる授業づくりができるようになることを考え、以下のように進めていく。

- 個別の指導計画における、それぞれのプロセス、また各プロセスをつなぐ部分に必要な視点や考え方を検討、整理していく。
- 整理された視点や考え方をもとに授業実践を行い、子どもの姿から視点や考え方が適切だったかどうかを評価していく。

4年計画の研究を3つの段階に分けて、順次進めていくこととする。以下のように一～三次を設定し、取り組んでいく。まず、一、二次では、学部ごとに共通の視点を設定、個別の指導計画の見直しを行う。三次では、各学部の一、二次の取り組みを、学校としてまとめる。

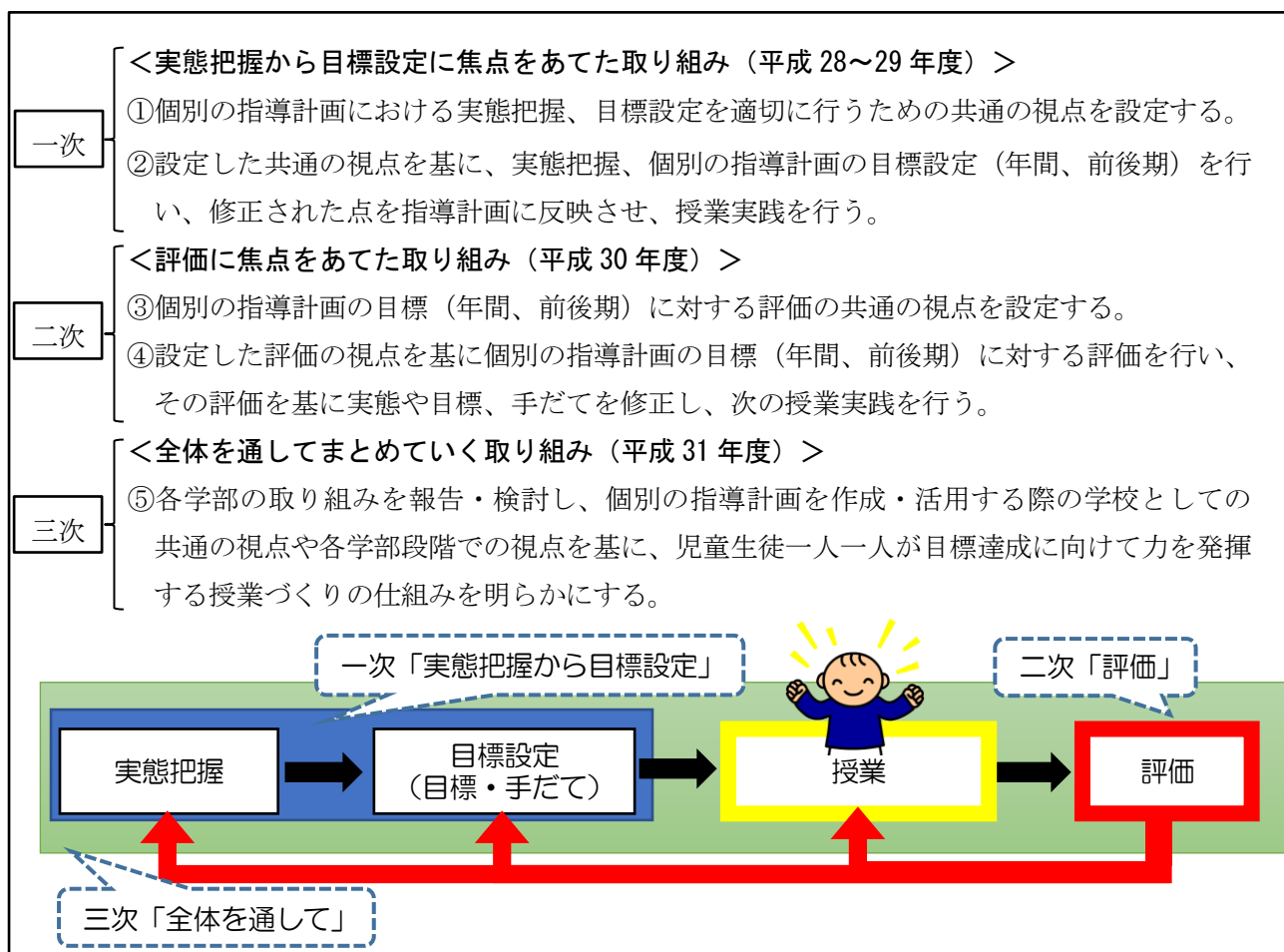


図3 第一次から三次の取り組み

## 4 昨年度の取り組み

本研究1年目に当たる昨年度は、個別の指導計画における実態把握から年間指導目標設定までの考え方の整理に取り組んだ。まず、個別の指導計画に記載されている実態を目標設定や指導により活かせるものにするために、学部ごとに児童生徒の実態を把握する際に必要だと思われる視点について、改めて検討、設定をした。その視点をもとに、現在作成している個別の指導計画の実態の部分について見直しを行った。各学部の共通点、相違点は以下の通りだった。

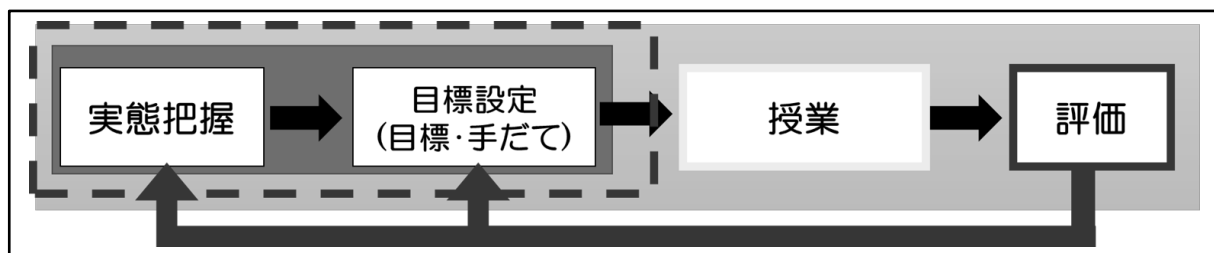


図4 研究1年目の取り組み

表1 実態把握において共通する点、相違点

	共通する部分	学部ごとに異なる部分
小学部	◎児童生徒の得意な面、強みとして発揮される面について捉えること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・得意な面、強みとして発揮される面の活かし方</li> <li>・目標設定までの道筋と「将来像」の位置づけ</li> </ul>
中学部	◎児童生徒が困っていたり、苦手としていたり弱みとして現れる面について捉えること その原因を考え、配慮や支援が必要である点と力を伸ばしたい点にわけ	
高等部	◎条件や支援などを併せて実態を捉えること、目標設定(目標・手だて)に活かす	

児童生徒の実態を把握する際に設定した視点として、児童生徒の得意な面、強みとして発揮される面について捉え、それを目標や指導の手だてを考える際に活用するという点、児童生徒が困っていたり、苦手としていたり弱みとして現れる面について捉え、原因を考えるという点、また、その原因から配慮や支援が必要である点をおさえたり、伸ばせる力として目標として設定したりすることが、3つの学部から挙げられた。さらに、「○○(場面、状況、相手)では、～できる。」「○○(支援)すると、～できる。」など、条件や支援などを併せて児童生徒の実態を捉えることで、目標や手だてが考えやすくなるということも共通して挙げられた。

児童生徒の実態を把握する際の視点や考え方には、3つの学部で共通する部分も多かった。しかし、把握した実態から目標を設定していく際にはその道筋の違いが見られた。この道筋の違いについては、学部の考え方の違いになるのか、発達段階としての違いになるものか、将来像の捉え方の違いによるものか、今後、検討していくことも必要であろう。



## 5 今年度の研究計画

今年度は、年間指導目標から各授業場面における目標設定の考え方を整理し、その考え方に沿って後期（9月から3月まで）の目標設定を行う。そして、後期の授業実践を通して、実態把握や目標設定に取り入れた視点や考え方が適切だったかどうかの検証を行っていく。

各学部の取り組みをまとめていく中で、児童生徒の実態把握や目標、手だてを考える際に全校共通で大事にしたい点と、それぞれの学部段階で大事にしたい点を整理し、一次の取り組みの成果と課題を明らかにしていく。

月	研究に関する主な活動
4	研究会議：平成29年度の研究の方向性について確認
7	校内授業研究会（高等部） 研究会議：各学部の取り組みについての報告
10	外部指導者による学部研究指導 中学部指導者 島宗徹（埼玉県教育局特別支援教育課）、名越斉子（埼玉大学） 高等部指導者 森正樹（埼玉県立大学）、小池浩次（県立羽生ふじ高等学園）
12	校内授業研究会（小学部、中学部） 小学部指導者 山中冨子（埼玉大学）、長江清和（埼玉大学） 中学部指導者 櫻井康博（埼玉大学） 外部指導者による学部研究指導 小学部指導者 小野里美帆（文教大学）、佐野貴仁（県立塙保己一学園）
1	外部指導者による学部研究指導 小学部指導者 小野里美帆（文教大学）、佐野貴仁（県立塙保己一学園） 中学部指導者 島宗徹（埼玉県教育局特別支援教育課）、名越斉子（埼玉大学） 高等部指導者 森正樹（埼玉県立大学）、小池浩次（県立羽生ふじ高等学園）
2	研究会議：各学部の取り組みの報告と一次のまとめについて 研究協議会に向けての検討、確認
3	第47回特別支援教育研究協議会開催 「研究集録第45号」発行及び配付 研究会議：今年度の研究のまとめと来年度の方向性